

# 独房

小林多喜二

青空文庫



誰でもそうだが、田口もあすこから出てくると、まるで人が変わったのかと思う程、饒じょうぜつ舌ぜつになつていた。八カ月もの間、壁と壁と壁との壁との間に——つまり小ツちやい独房ひとまの一間に、たつた一人ツ切りでいたのだから、自分で自分の声をきけるのは、独りひと言ごとでもした時の外はないわけだ。何かものをしやべると云つたところで、それも矢張り独り言でもした時のこと位だろう。その長い間、たゞ堰せき止められる一方でいた言葉が、自由になつた今、後から後からと押しよせてくるのだ。

保釈になつた最初の晩、疲れるといけないと云うので、早く寝ることにしたのだが、田口はどうとう一睡もしないで、朝まで色

んなことをしやべり通してしまった。自分では興奮も何もしていないと云っていたし、身体の工合も顔色も別にそんなに変ってはいなかったが、約一年目に出てきたシャバは、矢張り知らずに彼を興奮させていたのだろう。

これは、田口の話である。別に小説と云うべきものでもない。

### ズロースを忘れない娘さん

S署から「たらい廻まわし」になって、Y署に行った時だった。

俺の入った留置場は一号監房だったが、皆はその留置場を「特等室」と云って喜んでいた。

「お前さん、いゝ処ところに入れてもらつたよ。」と云われた。

そこは隣りの家がぴつたりくつついでいるので、留置場の中へは朝から晩まで、ラジオがそのまんま聞えてきた。——野球の放送も、演芸も、浪花節も、オーケストラも。俺はすっかり喜んでしまった。これなら特等室だ、蒸むしツ返えしの二十九日も退屈なく過ごせると思つた。然し皆はそのために「特等室」と云つていゝるのではなかつた。始め、俺にはワケが分らなかつた。

ところが、二日目かに、モサ（スリのこと）で入っていた目付のこわい男が、ニヤ／＼してながら自分の坐っている側へ寄つて来てみれと云つた。俺は好奇心にかられて、そこへズツて行くと、「あすこを見る。」

と云つて、窓から上を見上げた。

俺はそれで「特等室」の本当の意味が分つた。

高い金棒の窓の丁度真ツ上が隣りの家の「物ほし」になつていて、十六七の娘さんが丁度洗濯物をもつて、そこの急な梯子はしごを上つて行くところだつた。——それが真ツ下から、そのまゝ見上げられた。

その後、誰か一人が合図をすると、皆は看守に気取られないように、——顔は看守の方へ向けたまゝ、身体だけをズツて寄つて行くことになつた。

「ちえツ！ 又、ズロースをはいてやがる！」

なれてくると、俺もそんな冗談を云うようになった。

「共産党がそんなことを云うと、品なしだぜ。」

とエンコ（公園）に出ている不良がひやかした。

よく小説にあるように、俺たちは何時でもむずかしい、深刻な面をして、此処ここに坐つてばかりいるわけではないのだ。この決してズロースを忘れない娘さんに対する毎日々々の「期待」が、蒸しツ返えしの長い長い二十九日を、案外のん気に過ごさしてくれたようである。勿論もちろんその間に、俺は二三度調べに出て、竹刀しなで殴ぐなられたり、靴のまゝで蹴けられたり、締めこみをされたりして、三日も横になったきりでいたこともある。別の監房にいる俺たちの仲間も、帰えりには片足を引きずつて来たり、出て行く時に何んでもなかつた着物が、背中からズタ／＼に切られて戻ってきた

りした。

「やられた」

と云つて、血の気のなくなつた顔を俺たちに向けたりした。

俺たちはその度に歯<sup>は</sup>ぎしりをした。然し、そうでない時、俺たちは誰よりも一番<sup>は</sup>燥やいで、元気で、ふぎけたりするのだ。

十日、七日、五日……。だん／＼日が減つて行つた。そうだ、丁度あと三日という日の午後、夕立がやつてきた。

「干物！ 干物！」

となりの家の中では、バタ／＼と周章<sup>あわ</sup>てゝるらしい。

しめた！ 俺はニヤリとした。それは全く天<sup>てん</sup>裕<sup>ゆう</sup>だった。――

今日は忘れるぞ。

雨戸がせわしく開いて、娘さんが梯子を駈け上がって行く。俺は知らずに息をのんでいた。

畜生！ 何んてことだ、又忘れてやがらない！ 俺たちはがっかりしてしまった。

「六号！」

その時、看守が大声で怒鳴どなった。

見付けられたな、と思った。俺はギョツとした。見付けられたとすれば、俺だけではない、これから入ってくる何百という人たちの、こツそり蔵しまいこんでいた楽しみが奪われてしまうんだ。窓でも閉められてみる、此処はそのまゝ穴蔵になってしまう。

「調べだ。——でろ。」

俺は助かったと思つた。そして元氣よく立ち上がった。

三階に上がつて行くと、応接間らしいところに、検事が書記を連れてやつてきていた。俺はそこで二時間ほど調べられた。警察の調べのおさらいのようなもので、別に大したことはなかつた。調べが終つた時、

「真夏の留置場は苦しいだろう。」

ないことに、検事がそんな調子でお世辞を云つた。

「ウ、ウン、元氣さ。」

俺はニベもなく云いかえした。——が、フト、ズロースの事に気付いて俺は思わずクスリと笑つた。然し、その時の俺の考えの底には、お前たちがいくら俺たちを留置場へ入れて苦しめようた

って、どっこい、そんなに苦しんでなんかいないんだ、という考えがあつたのだ。

「ま、もう少しの我慢ですよ。」

検事が鞆をかゝえこんで、立ち上るとき云つた。俺は聞いていなかった。

## 豆の話

俺はどうく／＼起訴されてしまった。Y署の二十九日が終ると、裁判所へ呼び出されて、予審判事から検事の起訴理由を読みきかせられた。それから簡単な調書をとられた。

「じゃ、T 刑務所へ廻っていてもらいいます。いずれ又そこでお目にかゝりましょう。」

好男子で、スンなりとのびた白い手に指環ゆびわのよく似合う予審判事がそう云つて、ベルを押しした。ドアの入口で待つていた特高が、直すぐしやちこぼった恰好で入つてきた。判事の云う一言々に句読点でも打つてゆくように、ハ、ハア、ハツ、と云つて、その度に頭をさげた。

私はその特高に連れられたまゝ、何ベンも何ベンもグル／＼階段を降りて、バラツクの控室に戻つてきた。途中、忙しそうに歩いている色んな人たちと出会つた。その人たちは俺を見ると、一寸立ち止まつて、それから頭を振つていた。

「さ、これでこの世の見おさめだぜ、君。」

と特高が云った。

「二年も前に入っている三・一五の連中さえまだ公判になっていないんだから、順押しに行くとな随分長くなるぜ。」

俺はその時、フト硝子戸越しガラスに、汚い空地の隅ツこにほこりをかぶっている、広い葉を持った名の知れない草を見ていた。四方の建物が高いので、サン／＼とふり注いでいる真昼の光が、それにはとゞいていない。それは別に奇妙な草でも何んでもなかつたが——自分でも分らずに、それだけを見ていたことが、今でも妙に印象に残っている。理窟がなく、こんなことがよくあるものかも知れない。

俺は今朝Nが警察の出がけに持ってきてくれたトマトとマンジユウの包みをあげたが、しばらくうつろな気持で、膝の上に置いたきりにしていた。

控室には俺の外にコソ泥どろていの髯ひげをボウ／＼とのばした厚い唇の男が、巡査に付き添われて検事の調べを待っていた。俺は腹が減っているようで、食ってみると然しマンジユウは三つといかなかつた。それで残りをその男にやった。「髯」は見ている間に、ムシヤムシヤと食ってしまった。そして今度はトマトを食っている俺の口元をだまって見つめていた。俺はその男に不思議な圧迫を感じた。どたん場へくると、俺はこの男よりも出来ていないのかと、その時思った。

自動車は昼頃やってきた。俺は窓という窓に鉄棒を張った「護送自動車」を想像していた。ところが、クリーム色に塗ったナツシユという自動車のオープンで、それはふさわしくなくハイカラなものだった。俺は両側を二人の特高に挟はさまれて、クツシヨンに腰を下した。これは、だが、これまでゞ何百人の同志を運んだ車だろう。俺は自分の身のまわりを見、天井を見、スプリングを揺すってみた。

六十日目に始めてみる街、そしてこれから少なくとも二年間は見ることはない街、——俺は自動車の両側から、どんなものでも一つ残らず見ておかなければならないと思った。

麴町何丁目——四谷見付——塩町——そして新宿……。その日

は土曜日で、新宿は人が出ていた。俺はその雑踏の無数の顔のなかゝら、誰か仲間のものが一人でも歩いていないかと、探がした。だが、自動車はゴー、ゴーと響きかえるガードの下をくゞって、もはや淀橋へ出て行っていた。

前から来るのを、のんびりと待ち合せてゴトン／＼と動く、あの毎日のように乗ったことのある西武電車を、自動車はせっかちにドン／＼追い越した。風が頬の両側へ、音をたて、吹きわけて行つた、その辺は皆見慣れた街並だった。

N 駅に出る狭い道を曲がった時、自動車の前を毎朝めしを食いついて行っていた食堂のおかみさんが、片手に葱ねぎの束を持って、子供をあやしなから横切つて行くのを見付けた。

前に、俺はその食堂で「金属」の仕事をしていた女の人と十  
五銭のめしを食っていたことがあった。その時、多分いま前を横  
切つてゆく子供に、奥の方でコツクがものを云っているのが聞え  
た。

「オヤ、この子供は今ンちから豆ツて云うと、夢中になるぜ。い  
やだなア！」

そんなことを云つた。

すると、一緒にめしを食っていた女の人が、プツと笑い出して、  
それから周章てゝ真赤になつてしまった。

俺はそれをひよいと思ひ出したのだ。すると、急にその女の同  
志に対する愛着の感じが胸をうつてきた。その女の方は今どうし

ているだろう？　つかまらないで、まだ仕事をしているだろうか。

自動車は警笛をならした。そこは道が狭まかったのだ。おかみさんはチョツとこつちを振りかえつたが、勿論あれ程見知つている俺が、こんな自動車に乗つていようなぞという事には氣付く筈はずもなく——過ぎてしまった。俺は首を窮屈にまげて、しばらくの間うしろの窓から振りかえつていた。

「もう直ぐだ、あそこの角をまがると、刑務所の壁が見えるよ。」  
——俺はその言葉に、だまつて向き直つた。

青い禪

自動車は合図の警笛をならしながら、刑務所の構内に入って行った。

監獄のコンクリートの壁は、側へ行くと、思ったよりも見上げる程に高く、その下を歩いている人は小さかった。——自動車から降りて、その壁を何度も見上げながら、俺はきつく帯をしめ直した。

皮に入ったピストルを肩からかけ、剣を吊した門衛に小さいカードと引きくらべに、ジロ／＼顔をしらべられてから、俺たちは鉄の門を入った。——入ると、後で重い鉄の扉がギーと音をたて、閉じた。

俺はその音をきいた。それは聞いてしまつてからも、身体の中

に音そのまゝの形で残るような音だった。この戸はこれから二年の間、俺のために今のまゝ閉じられているんだ、と思った。

薄暗い面会所の前を通ると、その溜りたまから沢山の顔がこつちを向いた。俺は吸い残りのバツトをふかしながら、捕かまるときに持っていた全財産の風呂敷包たった一つをぶら下げて入って行った。煙草も、このたった一本きりで、これから何年もの間モウのめないのだ！

晴れ上がった良い天気だった。

トロツコのレールが縦横に敷かきついている薄暗い一見地下室らしく見えるところを通って、階段を上ると、広い事務所に出た。そこで私の両側についてきた特高が引き継ぎをやった。

「君は秋田の生れだと云ったな。僕もそうだよ。これも何んかのめぐり合せだろう。僕から云うのも変だが、何よりまア身体を丈夫にしてい給え。」

ずんぐりした方が一寸テレて、帽子の縁に手をやった。

「ごじゃ〜と書類の積まされた沢山の机を越して、窓際近くで、顎あごのしやくれた眼のひツこんだ美しい女の事務員が、タイプライターを打ちながら、時々こつちを見ていた。こういう所にそんな女を見るのが、俺には何んだか不思議な気がした。

持ちものをすっかり調らべられてから、係が厚い帳面を持ってきて、刑務所で預かる所持金の受取りをさせられた。捕かまる時、オレは交通費として現金を十円ほど持っていた。俺たちのように

運動をしているものは、命と同じように「交通費」を大切にして  
 いる。——印を押そうと思つて、広げられた帳面を見ると、俺の  
 名から二つ三つ前に、知っている名前のあるのに目がとまった。  
 それは名の知れている左翼の人で、最近どうして書かなくなつた  
 のだろうと思つていた人だった。ところが、此処にいたのだ。こ  
 の人も！ そう思うと、俺は何んだか急に気が強くなるのを感じ  
 た。

それから「仮調所」に連れて行かれて、裸かにされた。チンポ  
 も何もすっかり出して、横を向いたり、廻われ右をしたり、身体  
 中の特徴を記録にとられた。俺は自分でも知らなかつた背中のホ  
 クロを探し出された。其<sup>そこ</sup>処で、俺は「青い着物」をきせられたの

だった。

青い着物を着、青いももひき股引をはき、青いふんどし禪をしめ、青い帯をしめ、ワラ草履ぞうりをはき、——生れて始めて、俺は「編笠あみがさ」をかぶった。だが、俺は禪まで青くなくなつていゝだろうと思つた。

向うのコンクリートの建物の間を、赤い着物をきた囚人が一列に並んで仕事から帰つてくるのが見える。

俺は始め身体がどうしてもこきぎさ小刻みにふるえて、困つた。

「どうだ、初めての着工合は……」

と看守が云つた。

俺は、知らないうちに入っていた肩から力を抜いて、ゆっくり、大きく息を吸いこんだ。

「この廊下を真ツ直ぐに行くんだ、——編笠をかぶつて。」

俺は看守の指さす方を見た。

長い廊下の行手に、沢山の鉄格子の窓を持った赤い煉瓦れんがの建物がつつ立っていた。

俺はだまつて、その方へ歩き出した。

アパアト住い

「南房」の階上。

独房——「No. 19.」

共犯番号「セ」の六十三号。

警察から来ると、此処は何んと静かなところだろう。長い廊下の両側には、錠じょうの下りた幾十という独房がズラリと並んでいた。俺はその前を通ったとき、フトその一つの独房の中から低いしわぶきの声を耳にした。俺はその時、突然肩をつかまれたように、そのどの中にも我々の同志が腕を組み、眼を光らして坐っているのだ、ということを感じた。

俺は最初まだ何にも揃そろっていないガランドウの独房の中に入れられた。扉が小さい室に風を煽あおって閉まると、ガチャン／＼と鋭い音を立て、錠が下り、——俺は生れて始めて、たった独りにされたのだ。

俺は音をたてないように、室の中を歩きまわり、壁をたゝいてみ、窓から外をソツと覗のぞいてみ、それから廊下の方に聞き耳をたてた。

誰か廊下を歩いてゆく。立ち止まって、その音に何時でも耳をすましていると、急にワクワクと身体が底から顫ふるえてくる——恐怖に似た物狂おしさが襲つてきた。その時、今でも覚えている、俺はワツと声をあげて泣けるものなら、子供よりもモツと大声を上げて、恥知らずに泣いてしまいたかった。

しばらくして、赤い着物をきた雑役が、色々な「世帯道具」——その雑役はそんなことを云つた——を運んできてくれた。

「どうした？ 眼が赤いようだな。」

と、俺を見て云つた――

「なに、じき慣れるさ。」

俺は相手から顔をそむけて、

「バカ！ 共産党が泣くかい。」

と云つた。

箒<sup>ほうき</sup>。ハタキ。渋紙で作つた塵取<sup>ちりとり</sup>。タン壺。雑巾。

蓋付<sup>ふた</sup>きの茶碗二個。皿一枚。ワツパ一箇。箸<sup>はし</sup>一ぜん。――それ

だけ入つている食器箱。フキン一枚。土瓶<sup>どびん</sup>。湯呑茶碗一個。

黒い漆<sup>うるしぬり</sup>塗<sup>ぬり</sup>の便器。洗面器。清水桶。排水桶。ヒシヤク一個。

縁のない畳一枚。玩具<sup>おもちゃ</sup>のような足の低い蚊帳<sup>かや</sup>。

それに番号の片<sup>きれ</sup>と針と糸を渡されたので、俺は着物の襟<sup>えり</sup>にそれ

を縫いつけた。そして、こつそり小さい円まるい鏡に写してみた。すると急に自分の顔が罪人になって見えてきた。俺は急いで鏡を机の上に伏せてしまった。

雑役が用事の最後に、ニヤ／＼笑いながら云った。

「お前さん今度が初めてだね。これで一通りの道具はちやアんと揃つてるもんだろう。これからこの室が長い間のお前さんのアパートになるわけさ。だから、自分でキッチン／＼と綺麗きれいにしておいた方がいゝよ。そしたら却なかなか々愛着が出るもんだ。」

それから、看守の方をチラツと見て、

「ヘン、しゃれたもんだ、この不景氣にアパート住いだなんて！」  
と云つて、出て行つた。

## 長い欧州航路

監獄に廻わってから、何が一番気持ちが悪かったかときかれたら、俺は六十日目に始めてシャボンを使ってお湯に入ったことだと云おう。

湯槽ゆぶねは小じんまりとしたコンクリートで出来ていて、お湯につかっているながら、スイッチをひねると、ガチャン、ガタン、ガチャン、ガタン、ゴボン、ゴボンとスチームが入ってくるようになっていた。

入浴時間

十五分

規定の時間を守らざるものは入浴の順番取りかえることあるべし

警察の留置場にいたときよく、言問橋の袂たもとに住んでいる「青空一家」や三河島のバタヤ（屑買い）が引張られてきた。そんな連中は入つてくると、臭いくさジト／＼したシャツを脱いで、虱しらみを取り出した。真つ黒なコロツとした虱が、折目という折目にウジヨ／＼たかっていた。

一度、六十位の身体一杯にヒゼンをかいたバタヤのお爺さんが這はい入つてきたことがあった。エンコに出ている、飲食店の裏口を廻つて歩いて、ズケ（残飯）にありついている可哀相なお爺さんだった。五年刑務所において、やっとこの正月出てきたんだから、

今年の正月だけはシャバでやって行きたいと云っていた。——俺はそのお爺さんと寝てやっているうちに、すっかりヒゼンをうつされていた。それで、この六十日目に入るお湯が、俺をまるで夢中にさせてしまった。

そこは独房とちがって、窓が低いので、刑務所の広い庭が見えた。低く円るく刈り込まれた松の木が、青々とした綺麗な芝生の上に何本も植えられていて、その間の小径の、あちこちに赤い着物のんきが蹲んで、延び過ぎた草を呑気のんきそうに摘んでいた。黒いゲートルを巻いた、ゴム足袋の看守が両手を後にまわして、その側をブラ／＼しながら何か話しかけていた……。夕陽が向う側の監獄の壁を赤く染めて、手前の庭の半分に、煉瓦建の影を斜ななめに落して

いた。——それは日が暮れようとして、しかもまだ夜が来ていない<sup>ひと</sup>一時の、すべてのものがその動きと音をやめている時だった。私はそのなごやかな監獄風景を眺めながら、たゞお湯の音だけをジャブくたて、身体をこすっていた。ものみんなが静かな世界に、お湯のジャブくだけが音をたて、いるのが、何かしら今だに印象に残っている。

次の日は「理髪」だった。——俺はこうして、此処へ来てから一つ一つ人並みになって行った。——この床屋さんは赤い着物を着ている。

顔のちつとも写らない壊れた小さい鏡の置いてある窓際に坐ると、それでも首にハンカチをまいて、白いエプロンをかけてくれ

る。この「赤い」床屋さんは瘤こぶの多いグル／＼頭の、太い眉をした元船員の男だった。三年食っていると云った。出たくないかときくと、なアに長い欧州航路を上陸をせずに、そのまゝ二三度繰りかえしていると思えば何んでもない、と云って笑った。

「アパアト住い」と云い、又この「欧州航路」と云い、こゝにいろいろの赤い着物も、そんなことを自分の家にいるよりも何んでもなく云つてのける。

用意が出来るよ、この床屋さんが後に廻りながら、

「バリカンで、ジョッキ／＼やっつけてしまうぜ。」  
と云った。

それは分つていて……しかし云われてみると、矢張りギョツと

した。

「頼む！ 少しは長くしておいてくれよ。」

「こゝん中にいて、一体誰に見せるんだ。」

と云つて、クツ、クツと笑つた。

「そうか、そうか、分つた。面会に来る女ひとがあるんだらうからな

——

それで俺の髪だけは助つた。然しこの理髪師はニキビであろうが、何んであろうが、上から下へ一気に剃かみそり刀を使つて、それをそり落してしまつた。

俺がヒリ／＼する頬を抑えていると、ニヤ／＼笑いながら、

「こゝは銀座の床屋じゃないんだからな。」

と云った。

### 赤色体操

俺だちは朝六時半に起きる。これは四季によって少しずつ違う。起きて直ぐ、蒲団を片付け、毛布をたゝみ、歯を磨いて、顔を洗う。その頃に丁度「点検」が廻わってくる。一隊は三人で、先頭の看守がガチャンくと扉を開けてゆくと、次の部長が独房の中を覗きこんで、<sup>のそ</sup>点検簿と引き合せて、

「六十三番」

と呼ぶ。

殿<sup>しんが</sup>りの看守がそれをガチャン／＼閉めて行く。

七時半になると「ごはんの用——意！」と、向う端の方で雑役が叫ぶ。そしたら、食器箱の蓋の上にワツパと茶碗を二つ載せ、片手に土瓶を持って、入口に立って待っている。飯の車が廊下を廻わってくるのだ。扉が開いたら、それを差出す。——円るい型にハメ込んだ番号の打つてある飯をワツパに、味噌汁を二杯に限って茶碗に、それから土瓶にお湯を貰う。味噌汁の表面には、時々煮込こまれて死んだウジに似た白い虫が浮いていた。

八時に「排水」と「給水」がある。新しい水を貰って、使った水を捨て、もらい、便器を廊下に出して掃除をしてもらう。(これが一日に二度で、昼過ぎにもある。)

それが済むと、後は自由な時間になる。小さい固い机の上で本を読む。壁に「ラジオ体操」の図解が貼りつけてあるので、体操も出来る。

独房の入口の左上に、簡単な仕掛けがあつて、そこに出ている木の先を押すと、カタンと音がして、外の廊下に独房の番号を書いた扇形の「標示器」が突き出るようになっていた。看守がそれを見て、扉の小さいのぞきから「何んだ？」と、用事をきゝに來てくれる。

昼過ぎになると、担当の看守が「明日の願ひ事」と云つて、廻わってくる。

キャラメル一つ。林檎 十銭。

差入本の「下附願」。

書信 封緘ふうかん葉書二枚。

着物の宅下げ願。

運動は一日一度——二十分。入浴は一週二度、理髪は一週一度、診察が一日置きにある。一日置きに診察して貰えるので、時にはまるで「お抱え医者」をはべ侍らしているゼイタクな気持を俺だちに起させることがある。然し勿論その「お抱え医者」なるものが、どんな医者であるかということになれば、それは全く別なことがある。

夜、八時就寝、たつぷり十一時間の睡眠がとれる。

俺だちは「外」にいた時には、ヒドイ生活をしていた。一カ月以上も元気でお湯に入らなかつたし、何日も一日一度の飯で歩き廻つて、ゲツそり瘦<sup>や</sup>せてしまったこともある。一週間と同じ処に住んでいられないために、転々と住所をかえた。これ等のことが分らずにいて、長いうちにはウンとこたえていた。——それで、警察に六十日居り、それから刑務所と廻つてくるうちに、俺は自分の四肢がスンなりと肥えてゆくのを感<sup>じ</sup>じた。俺の場合、それは運動不足からくるむくみでも何んでもなく、はじめて身体が当り前にかえつて行くこの上もない健康からだつた。

俺だちの仲間<sup>ら</sup>は、今でも刑務所へ行くことを「別荘行」と云つている。ドンな場合でも決して屈することのないプロレタリアの

剛毅ごうきさからくる朗ほがらかさが、その言葉のうちに含まさっているわけだ。然し、そればかりでなしに、俺だちにとつては本来の意味——いわばブルジョワ的な「休息」という意味でも、此処は別荘であるということ、俺は発見した。俺だちは、だから此処で、出て行く迄に新しい精氣と強い身体を作っておかなければならないのだ。

だが、さすがにこの赤色別荘は、一銭の費用もかゝらないし、喜樂的などころか、毎日々々が鉄の如き規律のもとに過ぎてゆくのだ——然し、それは如何にも俺だちにふさわしいので、面白いと思つている。

「さ、これから赤色体操を始めらんだぞ。」

独房の中で「ラジオ体操」をやる時には、俺は何時でもそう云っている。こゝが赤色別荘なら、こゝでやるラジオ体操も従って赤色体操なわけである。

俺は元気よく、カ一杯に手を振り、足をあげる。

### 松葉の「K」「P」

運動場は扇形に開いた九つのコンクリートの壁がツツ立っていて、八つの空間を作っている。その中に一人ずつ入って、走り廻る。——それを丁度扇の要かなめに当る所に一段と高い台があつて、其処に看守が陣取り、皆を一眼に見下している。

俺だちの関係で入ったものは、運動の時まで独りにされる。ゴツホの有名な、皆が輪になって歩き廻わっている「囚人運動」は、泥棒か人殺連中の囚人運動で、俺だちの囚人運動は矢張りゴツホには描けなかつたのだろう。

俺はその中で尻をはしよつて、もろはだ両肌ぬぎになり、おいち二、

おいち二、と馳け足をはじめ。二十分だ。俺は運動に出ると、何時でも、その速力の出し工合と、身体の疲労の仕方によつて、自分の健康に見当をつける素朴な方法を注意深く実行している。

走りながら、こつちでワザと大きな声をあげると、隣りを走っている同志も大きな声を出した。エヘンとせき払いをすると、向う端で誰かゞ、エヘンと答える。それから時にはひじ肱で、壁をたゝ

いて、合図をした。

そのコンクリートの壁には、看守の目を盗んで書いたらしく、泥や——時には、何処から手に入れるものか白墨で「共」という字や、中途半端な「※」「※や、K・P（共産党の略字）」という字が幾つも書かれている。看守が見付け次第それを消して廻わるのだが、次の日になると、又ちアんと書かれている。雨の降った次の日運動に出たとき、俺は泥をソツと手づかみにして、何ベンも機会を覗ったが、ウマク行かなかつた。俺はどうもそういう事では、ボンくらかも知れない。

或る朝、運動場の端の方にある焼木の柵の割れ目に、松葉の本々々を丹念に組合せて作られた「K」と「P」を発見した。俺

はその時の喜びを忘れることが出来ない。俺は急に踊るときのよ  
うな恰好をして——走り出した。看守が高いところから、俺の方  
を見た。看守の眼を盗みながら、どの位の用意と時間をかけて、  
それを作ったのだろう。その一つ一つの動作をしている同志の気  
持が、そのまゝ俺に来るのだ。

同志は何処にでもいるんだ、何よりそう思った。一度、本を読  
むのに飽きたので、独房の壁の中を撫でまわして、落書を探がし  
たことがある。独房は警察の留置場とちがって、自分だけしか入  
っていないし、時々点検があるので、落書は殆んどしていない。  
然し、それでも俺はしばらくして、色んな隅ツこから何十という  
「共産党」や旗やK・Pを探がし出すことが出来た。俺の前にこ

の同じ室に入っていた同志はどんな人であつたらう。俺はそれらの落書の匂においでもかぐように、そこから何かの面影でも引き出そうとした。「書信室」へ行くと、そこは机でも壁でも一杯に思ふ存分の落書きがしてある。俺も手紙を書きに行つたときは、必ず何か落書してくることに決めていた。

成る程、俺は独房にいる。然し、決して「独り」ではないんだ。

せき、くさめ、屁

屁への音で隣りの独房にいる同志の健在なことを知る——三・一五の同志の歌で、シヤバにいたとき、俺は何かの雑誌でそれを読

んだことがあった。此処へ来て初めて分つたのだが、どの監房でも皆がよく屁をしていた。——然し俺の場合一日に四十から五十、いやそれ以上の屁が出るで弱ってしまった。これではかえって隣りにいる同志はキット俺の健康を気遣きづかっているかも知れない。

俺はどうしたのかと思つた。診察のとき、屁のことを医者に云つた。

「それは醜はづ醜こし易い麦飯を食つて、運動が不足だからですよ。」と、このお抱え医者は事もなげに云つて、それでも笑つた。

そのことがあつてから、俺は屁の事について考えた。此処にいと、どんなに些さ細さいなことに対しても、二日も三日もとツくりと考えられるのだ。そして、これからは次々と出くる屁を、一々丁て

いぬい  
寧に力をこめて高々と放すことにした。それは彼奴等きやつらに対して、この上もないブツ弾になるのだ。殊にコンクリートの壁はそれを又一層高々と響きかえらした。

しばらく経ってから気付いたことだが、早くから来ているどの同志も、屁ばかりでなく、自分独特のくさめとせきをちアんと持っていて、それを使っていることだった。音楽的なもの、示威的なもの、嘲笑的なもの……等々。

夜になって、シーンと静まりかえっているとき、何処かの独房から、このくさめとせきが聞えてくる。その癖から、それが誰かすぐ分る。それを聞くと、この厚いコンクリートの壁を越えて、口で云えない感情のこみ上がってくるのを感じる。

俺だちは同志の挨拶をかわす方法を、この「せき」と「くさめ」と「屁」に持っているワケだ。だから、鼻の穴が微妙にムズ痒がゆくなつて、今くさめが出るのだなと分ると、それを実に大切にす  
 るんだ。

——俺もしばらくして、せきとくさめに自分のスタイルを持つ  
 ことに成功した。

オン、ア、ラ、ハ、シヤ、ナウ

高い窓から入ってくる日脚の落ち場所が、見ていると順々に変  
 つて行つて——秋がやってきた。運動から帰つてきて、扉の金具

にさわってみると、鉄の冷たさがヒンヤリと指先にくるようになった。

俺は初めての東京の秋の美しさを、来る日も来る日も赤い煉瓦と鉄棒の窓から見える高く澄みきった空に感じることが出来た。

——北の国ではモウ雪まじりのビシヨ／＼雨が降っている頃だ。

——今までそうでもなかったのに、隣りの独房でさせているカタ、コトという物音が、沁みるような深さで感ぜられる。隣りの同志は「全協」だろうか、P（無新）の人だろうか、Y（無産青年）だろうか、それとも党員だろうか……？——秋深く隣は何をする人ぞ。

扉が突然ガチャン／＼と開いた。

「どっこいしょ！」

蒲団をかづいできた雑役が、それをのしんと入口に投げ出した。汗をふきながら、

「こんな厚い、重たい蒲団つて始めてだ。親ツてこんな不孝ものにも、矢張りこんなに厚い蒲団を送つて寄こすものかなア。」

俺はだまつていた。

独りになつて、それを隅の方に積み重ねながら、本当にそれがゴワ／＼していて重く、厚くて、とてつもなく巾が広いことを知った。

その後、俺は外の人そとに「夜、蒲団があまり重くて寝苦しい時には、この重さが一体何んの重さであるか位は考えてみないわけで

もない。」そんなセンチメンタルなことを書いたことがあった。

蒲団と一緒に、あわせ 袷が入ってきた。

二三日して、寒くなつたので着物をき換えたとき、袷に何か入っているらしいので、オヤと思つて手探ぐりにすると、小さいカードのようなものが出てきた。

卯の歳

文珠菩薩

守本尊

金と朱で書いた「お守」だった。

マルキストにお守では、どうにもおさまりがつかない、俺は独りでテレてしまった。

中を開けてみると「文珠菩薩真言」として、朝鮮文字のような字体で、「オン、ア、ラ、ハ、シヤ、ナウ」と書かれている。

「オン、ア、ラ、ハ……………」

俺は二三度その文句を口の中で繰り返している。

却々スラ〜と云えない。然しそれを繰り返しているうちに、俺は久し振りで長い間会わないこの愚かな母親の心に、シミ／＼と触れることが出来た。

俺たちはどんなことがあると、泣いてはいけないそうだ。どんな女がいようと、惚ほれてはならないそうだ。月を見ても、もの想いにふけてはいけないそうだ。母親のことを考えて、メソメソしてもならないそうだ——人はそう云う。だが、この母親は俺

がこういう処に入っていると知らずに、俺の好きな西<sup>すい</sup>瓜<sup>か</sup>を買っておいて、今日は帰ってくる、そしてその日帰って来ないと、明日は帰ってくる」と云って、たべたがる弟や妹にも手をつけさせないで、終<sup>しま</sup>いにはそれを腐らせてしまったそうだ。俺は此処へ来てから、そのことを、小さい妹の仮名交りの、でかい揃わない字の手紙で読んだ。俺はそれを読んでから、長い間声をたてずに泣いていた。

俺には、身体の小さい母親が、ちよこなんと坐って、帯の間に手をさしはさんでいる姿が目に見える。それが、何時でも心配事のあるときの、母の恰好だったからである。

プロレタリアの旗日

コツ、コツ、コツ………。

隣りの独房から壁をたゝいてくる。

コツ、コツ、コツ………。

こつちからも直ぐたゝきかえしてやる。

隣り同志の壁のたゝき方は色々に変つた。それはみんな我々の歌の拍子になつていた。俺ときたら「インターナショナル」でさえ、あやふやにしか知っていないので困つた。相手のたゝいて寄よこす歌が分ると、そのしるしに、こつちからも同じ調子で打ちかえしてやる。隣りはその間、自分のをやめて聞いているのだ。そし

て俺のが終ると、

ドン、ドン、ドン……………。

と打ってよこす。——これで二人の同志の意志が完全に結ばれるんだ。

毎日々々が同じな、長い／＼退屈な独房で、この仕草の繰り返えしは一日の行事のうちで、却々重要な場面をしめている。ある同志たちが長い間かゝって、この壁の打ち方から自分の名前を知らせあつたり、用事を知らせあつて連絡をとつたときいたことがあるので、俺も色々と打ち方の調子をかえたり、間隔を置いたり、ちゞめたりしてやってみようとしたが、うまく行かなかつた。

俺だちはお互に起床のときと、就寝のときと、飛行機が来たと

きと、元気なときと、クシヤンとしたときと、そして「われくの旗日」のときに壁を打ち合った。——ブルジョワ階級が色んな「旗日」を持っているのと同様に、もはや今では日本のプロレタリアートも自分自身の「旗日」を持っている！

ところが、どうしても残念なことが一つあった。それは隣りの同志が実によく「われくの旗日」を知っていることである。：いや、そうでなかった。それなら俺だって却々負けずに知っている。実は、その日になると、俺は何時でも壁を打つことで、隣りの同志にイニシアチヴを取られてしまうのだ。今度こそ俺の方から先手を打ってやろう、と待っている、だが、その日になると、又もしてやられるんだ。——九月一日も、十月七日も、残念なこ

とには「十一月七日」にもやられてしまった。

その日——十一月七日の朝「起床」のガラン／＼が鳴ったせつな、監房という監房に足踏みと壁たゝきが湧わき上がった。独房の四つの壁はムキ出しのコンクリートなので、それが殷いん々いんともつて響き渡った。——口笛が聞える。別な方からは、大胆な歌声が起る。

俺は起き抜けに足踏みをし、壁をたゝいた。顔はホテリ、眼には涙が浮かんできた。そして知らないうちに肩を振り、眉をあげていた。

「ごはんの用——意ッ！」

俺はそれを待っていた。丁度その時は看守も雑役も、俺のいる

監房 (No. 19.) から一番離れた (No. 1.) のところにいるのだ。

——俺はいきなり窓際にかけて寄ると、窓枠に両手をかけて力をこめ、ウンと一ふんばりして尻上りをした。そして鉄棒と鉄棒の間に顔を押しつけ、外へ向って叫んだ。

「ロシア革命万歳!!」

「日本共産党バンザア—イ!!」

ワア—ツ! という声が何処かの——確かに向う側の監房の開いた窓から、あがった。向うでも何かを云っている。俺の胸は早鐘を打った。

飯の車が俺の監房に廻わってきたとき、今度は向うの一番遠い監房——No. 1. あたりで「ロシア革命万歳!!」を叫んでいるのが

聞えた。看守はむずかしい顔をしていた。——誰か口笛で「インターナショナル」を吹いている……。俺は飯をそのままにして置いて——興奮し、しばらくつつ立っていた。

丁度、飯を食い終る頃だった。ゲツキになっている階上の廊下をバタ／＼と誰か二、三人走って行く音がした。何処かの監房が荒々しく開けられた。そして誰か引きずり出されたらしい。突然、もつれ合った叫声が起った。身体と身体が床の上をずる音がして、締め込みでもされているらしいつまった鈍い声が聞えた。——瞬間、今迄喧やかましかった監房という監房が抑えられたようにシーンとなった。俺は途中まで箸はしを持ちあげたまゝ、息をのんでいた。

と、——その時、誰か一人が突然壁をたゝいた。それがキツか

けに、今度は爆発するように、皆が足踏みをし、壁をたゞき出した。

われ々の十一月七日を勇敢に闘った同志は、そのなかを大声で何か叫びながら、連れて行かれた。俺だちはその声が遠くなり、聞えなくなる迄、足踏みをやめなかつた。

### 出廷

寒い冬の朝、看守が覗きのぞから眼だけを出して、

「今日はお出廷だぜ。」  
と云つた。

飯を食ってから、俺は監房を出て、看守の控室に連れて行かれた。皆は火鉢ひばちの縁に両足をかけて、あたっていた。「火」を見たのは、それが始めてだった。俺はその隅の方で身体検査をされた。「これは何んだ？」

袂を調べていた看守が、急に職業柄らしい顔をして、何か取り出した。俺は思わずギョツとした。——だが、それはお守だった。

「あ、お守だよ。」

俺はホツとして云った。

看守はあやふやな、分らない顔をして、

「へ——？ お守？……どうしたんだ？」

と独り言のように云った。

「おふくろがね……。」

俺がそう云いかけると、その年寄った看守はみんな云わせず、

「あゝ、そうか、そうか、——そうだろう！  
もったい勿体ないことだ

！」

と云つて、それを額へもつて行つて頂いた。それから元通りにして、丁寧に袂にもどした。

「さ、両方手を出したり。」

看守が手錠の音をガチャ／＼させて、戻つてきた。そして揃えて出した俺の両手首にそれをはめた。鉄の冷たさが、びっくり吃驚させる程ヒヤリときた。

「冷てえ！」

俺は思わず手をひっこめた。

「冷てえ？——そうか、そうか。じゃ、シャツの袖口をのばしたり。その上からにしよう。」

「有難<sup>ありがた</sup>てえ。頼む！」

「こんな恰好見たら、親がなんて云うかな。不孝もんだ！」

年を取って指先が顫えるらしく、それにかじかんでいるので、うまく鍵穴に鍵が入らずガチャガチャとそのまわりをつつついた。向い合いながら、俺はその前こぐみになっている看守の肩を見ている。

その日の出廷はもう一人いた。小柄な瘠せた男で、寒そうに薄

い唇の色をかえていた。「第二無新」の同志らしかった。

俺は半年振りで見える「外」が楽しみでならなかった。護送自動車  
 が刑務所の構内を出てから、編笠を脱ぎ、窓のカーテンを開け  
 てもらった。——年の暮れが近く、街は騒々しく色々な飾をして  
 いた。ところどころ 処々では、楽隊がブカ／＼鳴っていた。

N町から中野へ出ると、あののろい西武電車が何時のまにか複  
 線になって、一旦雨が降ると、こねくり返える道がすっかりアス  
 フルトに変わっていた。随分長い間あそこに坐っていたのだとい  
 う事が、こと新しい感じになって帰ってきた。

新宿は特に帰えりに廻わってもらふことにして、自動車は淀橋  
 から右に入って、代々木に出て、神宮の外苑を走った。二人は窓

硝子に頬も、額も、鼻もぺしやんこに押しつけて、外ばかりを見ていた。青バスの後に映画のビラが貼られているのを見ると、一緒の同志が「出たら、第一番に活動を見たいな。」と云った。

時代錯誤な議事堂の建物も、大方出来ていた。俺だちはその尖<sup>せ</sup>んとう塔を窓から覗きあげた。頂きの近いところに、少し残っている足場が青い澄んだ冬の空に、輪郭<sup>りんかく</sup>をハッキリ見せていた。

「君、あれが君たちの懐<sup>なつか</sup>しの警視庁だぜ。」

と看守がニヤ／＼笑って、左側の窓の方を少しあげてくれた。俺ともう一人の同志は一寸顔を見合せた。——警視庁と云えば、俺は前に面白い小説を読んだことがあった。

警視庁の建築工事に働きに行っている労働者の話なんだが、そ

の労働者がこの工事をウンと丈夫に作っておこうと云ったそうだと、ところが仲間に、よせやい、自分の首を絞めるものではないか、いゝ加減にやツつけて置けよとひやかされてしまった。すると、その労働者が、

「馬鹿云え。政権一度われらの手に入らば、あすこはゲー・ペー・ウの本部になるんだ。そのために今から精々立派な、ちつとやそつとで壊れない丈夫なものにして置くんだ！」

と云った。そういう筋のものだった。

小説嫌いの俺も、その言葉が面白かったので、記憶に残っていた。

その警視庁の高い足場の上で、腰に縄束をさげた労働者が働い

ていた……。それが小さく動いているのが見えた。

その日、予審廷の調べを終つて、又自動車に乗せられると、今度は何んとも云えないイヤな気持ちちがした。来るときは、それでもウキ／＼していたのだ。

新宿は矢張り雑踏していた。美しい女が自動車の前で周章てるのを見ると、俺だちは喜んだ。——だが、何故こんなに沢山の「女」が歩いているのだろうか。そして俺が世の中にいたとき、決してこんな女が沢山歩いていなかった。これは不思議なことだと思つた。女、女、女……俺だちの眼は、痛くなるほど雑踏の中から、女ばかりを探がし出していた……。

刑務所との距離が縮まって行く。俺たちは途中色んな冗談を云い合つたものだ。然し二人ともだん／＼黙り込んできた。

「街を見たし……又、坐つてるさ……。」

俺はそれだけをポツンと云つた。そして、それっ切り黙つてしまつた。

今はモウ自動車は省線のガードをくゞつて、N町へ入つていた。今年も、あと五日しかない。

### 独房小唄

「……私この前ドストイエフスキーの『死の家の記録』を読んで

から、そんな所で長い／＼暗い獄舎の生活をしている兄さんが色々な想像され、眠ることも出来ず、本当に読まなければよかつたと思つています。」

「でも、面会に行く度に、兄さんはとてもフザケたり、監獄らしくない大声を出して笑つたり、どの手紙を見ても呑気なことばかり書いてるので、——一体どういうワケなのか、私には分かりません。」

俺はこの手紙を見ると、思わず吹き出してしまった。ドストイエフスキーとプロレタリアの闘士をならべる奴もあるもんでない、と思つた。俺も昔その本を退屈しいしい読んだ記憶がある。成る程、人道主義者には此処はあんなにも悲痛で、陰惨で、救いのな

いものに見えるかも知れないが未来を決して見失うことのないプロレタリアートは何処にしようが「朗か」である。のん気に鼻唄さえうたっている。

時々廊下で他の「編笠」と会うことがある。然したった一目で、それが我々の仲間か、それともコソ泥か強盗か直ぐ見分けがついた。——編笠を頭の後にはネ上げ、肩を振って、大股おおまたに歩いている、それは同志だった。暗い目差しまなざしをし、前こぶみに始終オドクとして歩いている他の犯罪者とハッキリちがっていた。

それどころか、雑役が話してきかせたのだが、俺たちの仲間のあるものは、通信室や運動場の一定の場所をしめし合せ、雑役を使って他の独房の同志と「レポ」を交換したり「獄内中央委員会」

というものさえ作っている、そして例えば、外部の「モツプル」と連絡をとって、実際の運動と結びつこうとしたり、内では全部が結束して「獄内待遇改善」の要求を提出しようとしているそうだ。

彼奴等がわれ／＼をひつつかんで、何処へ押しこもうとも、われ／＼は自分たちの活動を瞬時の間だつて止めようとはしていないのだ。——「独房」「独房」と云えば、それは何んだが地獄のような処でゞもあるかのように響くかも知れない。そのために、そこに打ち込まれることを恐れて、若しも運動が躊躇ちゆうちよさされると考えるものがあるとしたら、俺は神に（神に、と云うのはおかしいが）かけて誓おう——

「全く、のん気なところですよ。」と。

第一、俺は見覚えの盆踊りの身振りをしながら、時々独房の中で歌い出したものだ——

独どくぼう房よいとオコ、

誰で——もオおいで、

ドッコイシヨ

.....

附記 田口の話はまだく沢山ある。これはそのホンの一部だ。私は又別な機会に次々とそれを紹介して行きたいと思つて  
いる。





# 青空文庫情報

底本：「工場細胞」新日本文庫、新日本出版社

1978（昭和53）年2月25日初版

初出：「中央公論 夏期特集号」中央公論社

1931（昭和6）年7月

入力：細見祐司

校正：林 幸雄

2006年12月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# 独房

小林多喜二

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>